

古高ドイツ語„Isidor“における 定動詞の位置について（1）

下 寄 正 利

現代ドイツ語の語順は現代英語のそれに比べてかなり自由であるが、定動詞に関しては文中で占めるべき位置が決まっており、平叙文、補足疑問文では第二位、決定疑問文、命令文では第一位、副文では文末となっている。だがこうした定動詞の位置に関する規則もドイツ語に初めから存在していたわけではなく、これはドイツ語の歴史的変遷の結果であって、古高ドイツ語では、今日的な拘束力のある規則というものはまだ存在しておらず、定動詞は今日よりも自由な位置に置かれている。そしてこのことは古高ドイツ語に限らず、後の時代においても多かれ少なかれ見ることのできることである。しかしそうは言っても、古典語におけるような状態とは明らかに異なっており、古高ドイツ語では、定動詞の位置に関し今日的な厳密に守るべき規則というものはまだ無いにせよ、すでにある特定の位置に定動詞を置こうとする傾向が見られるとされている。これについてたとえば St. Sonderegger は次のように述べている。

relativ große Freiheit der Wortstellung, doch mit klaren Ansätzen zu einer bestimmten Gliederung der Stellung des Prädikats in verschiedenen Satztypen (Anfangsstellung des Verbuns im Frage- und Aufforderungssatz; Zweitstellung des Verbuns im Hauptsatz, aber keine festere Regelung im Nebensatz).¹⁾

本稿では古高ドイツ語期の文献資料の中から Isidor を取り上げ、こうした傾向がどの程度見られるのかということも含め、定動詞の位置全般について詳細に見てゆくことにする。Isidor をテキストに選んだ理由としては、次の 3 つがあげられる。まず第一に Isidor が翻訳されたのが 8 世紀末で、古高ドイツ語のごく初期の段階の状態を知ることができるため、第二に散文であるため韻律の制約を受けていない

ため、第三にIsidorの翻訳が当時としては非常にこなれたもので、当時のドイツ語の姿をよく伝えていると思われるためである。もっとも古高ドイツ語期というのは非常に多様な様相を呈している時期であり、Isidorについて言えるからといってそれが古高ドイツ語期全体はもとよりIsidorと同時代の古高ドイツ語にできえそのまま当てはめられるわけではないが、しかし多様な様相を呈する時期だからこそ、個々のテキストの言語の状態を個別的に研究、把握しておくことが第一に必要なようになってくると言えよう。なお本稿ではテキストとしてH. Eggersの校本を用いた。

さて、Isidor及びIsodorを含む古高ドイツ語散文における定動詞の位置については、これまでにすでにいくつかの研究が公にされている²⁾。その一つとしてまずH. Reis (1901) があげられる。この論文でReisは、韻文は韻律の制約を受けているということで、散文における定動詞の位置のみを扱っており³⁾、中でもIsidorとNotkerの作品 (Marcianus Capella) を中心に論を展開している。IsidorとNotkerの作品を中心に行っているのは、これらが当時としては非常にこなれた訳であり、ラテン語原文の影響がTatianなどに比べて少ないためである⁴⁾。しかし、これらの翻訳においてもラテン語の影響が全く無いわけではない。したがって定動詞の位置について考察を進めるにあたっては、ラテン語の影響による非ドイツ語的な箇所を排除する必要がある。そこでReisは次のような方法をとっている。

Bei Übersetzungen können daher nur solche Stellen berücksichtigt werden, in denen der Übersetzer von dem Text der lateinischen Vorlage abweicht.⁵⁾

しかしながら、Isidorのようにこなれた訳をしているものの場合、原文と語順が一致している箇所全てがそのまま非ドイツ語的とは考えられない。このような方法では、排除すべきでないような箇所まで排除されてしまうことになる。

Isidorを含めた古高ドイツ語散文における定動詞の位置について論じているものとしては次にP. Diels (1906(1967)) をあげることができる。この論文でもまたReisの場合と同様にラテン語の影響の問題に対しては、もっぱらラテン語原文と語順の異なっている箇所のみを資料として用いるという方法をとっており⁶⁾、この点からしてすでに問題があると言わざるを得ない。そのほかこの論文では、どのようなものをAnfangsstellung、あるいはMittelstellungと呼ぶかということについても、W. Brauneのfreie Anfangsstellungとgedeckte Anfangsstellungという考え方を取り入れるなど多々問題があり⁷⁾、そのためほとんど参考にはならないと言わざるを得ない。

ReisもDielsも、古高ドイツ語の散文について研究する際に生じてくるラテン語

原文の影響という問題に対して、共に原文と翻訳との間で語順が違っている箇所のみを考察の対象とするという方法で臨んでいるわけだが、これとは全く逆に、(もっともIsidorにおける定動詞の位置をそうした方法で研究している例は無いが、)たとえラテン語との一致が見られてもその箇所を切り捨てず、テキストをあるがままの状態で見えてゆくべきだという立場をとる者もある⁸⁾。たしかにラテン語との間に一致が見られるというだけでそれをすぐさまラテン語の模倣と断定することはできないし、またラテン語との間に相違が見られる箇所のみを調査の対象としたのでは得られた結果がどの程度文法的事実を反映しているのか疑問になってくるが、しかしこうした方法は行き過ぎで、ラテン語の影響の問題に対する取り組みの断念にほかならないと言わざるを得ない。

こうしたラテン語の影響の問題に対する相対する二つの態度を共に批判したものとしては、J. Lippert (1974) があげられる。この論文でLippertは、ラテン語原文と一致が見られる箇所をすべて切り捨てるのも、ラテン語の影響というものを一切無視するのも共に行き過ぎであるとした上で、従来の研究には借用統語の観点欠缺していたとし⁹⁾、IsidorとMonseer MatthäusとTatianにおいて、どのような借用統語がどの程度行われているか詳細な分析を試みており、その中で定動詞の位置に関する章を一章設けている¹⁰⁾。しかしながらこの論文の主眼はあくまで借用統語の問題にあり、定動詞の位置の問題はそれを解明するための材料に過ぎず、扱われているのも主文、それも平叙文のみである。またその平叙文について述べている箇所については首肯し難い部分も多々見受けられる。これについては以下本論で詳しく述べてゆくことにする。

さて、従来の研究の欠点をふまえた上で、本稿では各文タイプについて次のように考察を進めてゆくことにする。まず各文タイプにおいて、定動詞を特定の位置に置こうとする傾向が見られるかどうか、見られるとしたらそれはどのようなものかを調べてみることにする。その際ラテン語の影響の問題はひとまず考慮にいれず、すべての用例を対象とすることにする。というのは、たとえラテン語の影響があるにせよ、Isidorが非常にこなれた翻訳であることからして、定動詞の位置に関する傾向性というものがもし存在しているのなら、テキスト中にはっきり現れているはずだからである。そしてその後、そうして得られた結果にラテン語の影響というものが認められるかどうかを調べ、それが真にドイツ語的なものであることを確認することにする。標準語順が突き止められたら次に、定動詞がそれからはずれた位置に置かれている用例について考察を進めることにする。ラテン語の影響が見られるとしたら、むしろこちらの方であろうと予想されるが、そ

うした定動詞の位置がドイツ語本来のものなのかそれとも非ドイツ語的なものなのか、ラテン語の影響が見られるとすればどの程度見られるのかということを検討してゆくことにする。もっとも用例数の極端に少ない文タイプに対しては、このような方法をとることは不可能なので、その場合は当該の文タイプの標準的語順と言われている語順とそれぞれの用例の語順を比較する程度にならざるを得ない。またIsidorは大きく地の文と聖書からの引用文とに分けることができるが、以上のように論述を進めてゆく際、定動詞の位置やラテン語の影響といったことに関してこの二つの間に何か違いがあるかということも併せて見てゆくことにする。

1. 主 文

1. 1. 平叙文

まず主文のうち平叙文から見てゆくことにするが、現代ドイツ語ならばそれぞれの文を主文と副文に分けるのは非常に容易な作業と言えるであろう。しかしながら古高ドイツ語では、すでにここにおいて問題が生じてくる。すなわち、so, dher, huuandaなどで始まる文は、時として主文か副文か判別するのが困難なことがあるのである。前後関係で主文か副文か判別できる場合もあるが、そのようなケースばかりとは限らず、またラテン語原文が主文だからあるいは副文だからといってドイツ語でもそうであるとは言いきれない。そこで本稿では、相関語句の存在や文脈により主文か副文か断定できる場合を除き、これらの文については、章を改め、まとめて後で述べることにする。

また本稿では定動詞の位置を、第一位 (Anfangsstellung)、第二位 (Mittelstellung)、後置 (Späterstellung)¹¹⁾の大きく3つに分けて考察を行うが、各用例をこの3つに分類する際にもいくつかの問題が生じてくる。まず問題となってくるのが、複合文における定動詞の位置の扱い方である。というのは、複合文中では、定動詞の位置に関して複数の解釈が可能となる場合があるからである。そのような場合には、標準語順というものに照らし合わせて、それとの関連で第何位か判断することが必要となってくる。複合文において定動詞第何位と解釈すべきか複数の可能性の出てくるケースというのは、具体的には次の4つである。

1. 主語を同じくする並列の複合文の後続文の方で、主語が省略されており、並列接続詞の直後に定動詞がきている場合。
2. 主語を同じくする並列の複合文の後続文の方で、主語が省略されており、

並列接続詞の直後に主語以外の文成分が置かれており、その後定動詞がきている場合。

3. 副文が主文に先行する従属の複合文で、副文の直後に定動詞がきている場合。
4. 副文が主文に先行する従属の複合文で、副文の後に文成分が一つ置かれており、その後定動詞がきている場合。

この4つのケースについては、ひとまず考察の対象からはずし、平叙文における標準語順を突き止めた後に再び扱うことにする。

定動詞の位置を第一位と見なすか、第二位と見なすか、それとも後置とみなすかということについては、*aur*, *chiuuisso*を含んだ文も問題となってくる。*aur*, *chiuuisso*¹²⁾は副詞と接続詞の中間的存在で、ある時は副詞的に、ある時は接続詞的に用いられるが、個々の文においてそれが副詞的に用いられているのか接続詞的に用いられているのかは、文脈や原文との対比からでは判断するのが困難である。したがってこれらの語が文頭あるいは文頭の文成分の直後にあり、定動詞がそれに続いている文では、定動詞の位置についても複数の解釈が可能になってくる。こうした場合も、標準語順と照らし合わせて、それとの関連の中で判断してゆかなければならないだろう。よって複合文の場合と同様、ひとまず考察の対象からはずし、標準語順が明らかになったところで再度取り上げることにする¹³⁾。

それから定動詞第一位、第二位、後置という分類に関しては、否定文の扱い方も問題になってくる。古高ドイツ語では、全文否定の*ni*は定動詞の直前をその定位置としている¹⁴⁾。したがって、定動詞第一位の肯定文を否定文にすると、文頭に*ni*が来て、その次に定動詞という語順になり、定動詞第二位の肯定文を否定文にすると文頭に一文成分が置かれ、その次に*ni*、その次に定動詞という順番になる。もし定動詞の位置を数える際に*ni*も数の中に入れて、否定文の場合は定動詞が一つ後にずれることになり、定動詞の位置について論じる際に、肯定文と否定文を分けて扱わなければならないという不都合が生じてきてしまう。また、本来同一の語順と見なすべきものを、たとえば肯定文では第二位、否定文では第三位と呼ぶようなことは避けるべきであり、肯定文と否定文を同時に扱えるようにするためにも、本稿では定動詞の位置を数える際、*ni*は数にいれず、*ni*と定動詞を一まとまりとして扱うことにする。これは平叙文以外の文タイプについても同様とする。

さて、現代ドイツ語では、平叙文において定動詞は第二位に置くのが規則になっているが、古高ドイツ語でもすでに、定動詞第二位は、規則とまでは言えないにせよ、平叙文の標準的語順であったとされている。そこでこれが実際Isidorについ

でもあてはまるかどうか見てみると、主文283例中定動詞第二位となっているものは205例となっている。すなわち、7割以上が定動詞第二位を示しているわけで、よって定動詞第二位を平叙文の標準語順と仮定することができよう。もっともそれと同時に、残りの3割弱が定動詞第二位になっていないという事実にも注意を払う必要はあろう。

このように平叙文全用例を対象に調べた数値から、定動詞第二位が標準語順であろうと考えられるわけだが、次にこれがドイツ語本来のものであり、ラテン語の影響ではないことを確認しておくことにする。まずIsidorの地の文の方から見てみると、全用例151例中定動詞第二位となっているのは101例である。そしてこの101例中、ラテン語原文でも定動詞第二位となっているものを調べてみると、約2割の19例に過ぎない。それにこの19例にしても、単に定動詞の一が一致しているというだけで、この内文の構造や文成分の配置に至るまで共通性が見られるものは15例に過ぎない。したがって定動詞第二位がラテン語の影響で多く用いられているとは全く考えられず、ドイツ語本来のものとする事ができよう。またこの19例を除いた残りの82例でラテン語原文の定動詞がどのような位置に置かれているかその内訳を見てみると、第一位が9例、第三位以降が36例、その内第三位が約半数の20例となっている。ここで第一位にも第二位にも第三位以降にも入っていない37例というのは何かというと、それはラテン語原文では定動詞あるいはそもそも該当する部分が無かったり、非常に自由な訳がされているために比較が不可能であるような例である。こうした箇所は、Isidorの地の文では50例出て来るのだが、ドイツ語が定動詞第二位を示している37例というのはその約四分の三にあたる。このことから、定動詞第二位が標準語順であることがさらに裏付けられると言えよう。さて、Isidorにおける引用部分の方は132例中104例が定動詞第二位で、その内ラテン語原文でも定動詞第二位となっているのは40例で、地の文の場合と比べかなり数が増えており、またこの内ほとんどがラテン語との間で定動詞の位置だけでなく、文の構造や文成分の配置に至るまで共通性を示している。しかしながら、この40例という数もその影響により引用部分の8割弱において定動詞を第二位にさせるに至るほどの数とは言えず、またIsidorの地の文について得られた結果をふまえてみても、引用箇所定動詞第二位が多く用いられているのもラテン語の影響ではなく、ドイツ語における定動詞の配置の傾向が現れたものと解すべきであろう。この場合むしろ逆に64例が原文で定動詞第二位になっていないということの方が重要で、定動詞を第二位に置こうとする強い傾向を証明していると言えよう。以上のことから、Isidorにおける平叙文では定動詞第二位が標準語

順であり、それは決してラテン語の影響によるものではないと考えることができる。

定動詞第二位が平叙文の標準語順だとすると、複合文中や、*aur, chiuuisso*を含んだ文における定動詞の位置を第何位と見なすかということもこれを念頭に置いて判断しなければならなくなってくる。まず複合文中の定動詞の位置については、先にあげた4つのケースすべてを定動詞第二位とすべきであろう。もし1と3のケースのみを定動詞第二位と見なし、2と4のケースを第三位とすると、複合文中においては定動詞第二位と同じぐらい第三位が多用されるといった結果に至り、これに対する原因説明が必要となってくる¹⁵⁾。したがって古高ドイツ語では、主語を同じくする並列の複合文の後続文の方で省略されている主語を補って第二位とするかどうか、あるいは従属の複合文で先行する副文を数に入れて第二位にするかどうかは、現代語のように規則化されておらず、まだ一貫性が無いと見るのが妥当な考え方と言えよう。

また*aur, chiuuisso*を持つ文についても、もしこれらの語が文頭にあり、その直後に定動詞がきている場合、それは副詞、これらの語が文頭の文成分の直後に置かれており、その後に定動詞がきている場合には接続詞と考えるべきであろう。よって、たとえば*chiuuisso*の例だと、次の二つの文の内、一番目の文における*chiuuisso*は副詞、二番目の文における*chiuuisso (gauuisso)*は接続詞であり、共に定動詞第二位ということになる。

423 *chiuuisso ist izs dher hohisto endi druhtin. (scilicet excelsus et dominus.)*

55-56 *der selbo gauuisso ist sunu, (Ipse est enim filius,)*

ちなみに、複合文の4つのケースと*aur*及び*chiuuisso*を持つ文を平叙文の用例数の中に加えると、平叙文は全用例328例中250例が定動詞第二位となり、定動詞第二位が全体の4分の3以上を占めることになる。

さて、次に定動詞第二位以外の語順について見てゆくことにする。定動詞第一位は、*Isidor*中には、地の文の箇所8例、引用箇所21例の計29例出てくる¹⁶⁾。この29例という数は、*Isidor*中の平叙文が全部で328例であるから、その1割にも満たない数である。ラテン語原文と比較してみると、29例中18例においてラテン語でも定動詞第一位となっており、その内17例では定動詞以外の文成分の配置についても、ラテン語との間に明らかな共通性が見られる。たとえば、

- 206 Quhad druhtin druhtine minemu: (Dixit dominus domino meo:)
 550-551 Liihhet imu druhtine in sinem liudim, (Placet sibi dominus in populo suo)
 667-668 endi arfullit inan gheist gotes forahtun. (et repleuit eum spiritus timoris domini.)

特に206の例では、所有代名詞の位置に至るまでラテン語と同じ語順になっている。また次の2例も、386ではラテン語の迂言的動詞形態がドイツ語で総合的動詞形態になっており、524-525では分詞が定動詞で訳されているといった違いは見られるが、文成分は全く同じ配置になっている。定動詞第一位の用例は全体としてラテン語との共通性を示す例が非常に多くなっていると言えよう。

- 386 endi uuiridit siin herduom oba sinem sculdrom, (et factus est principatus eius super humerum eius,)
 524-525 BIGUNSTON AUH ERIST UMBI SINAN NAMUN SPREH-
 HAN (INCIPIENTES PRIMUM DE NOMINE EIUS LOQUI)

しかしながら、そのような例ばかりではなく、ラテン語との間にはっきりとした違いを示している例も見られる。たとえば、

- 218-219 sendida mih after guotliihhin zi dheodom, (Post gloriam misit me ad gentes,)
 606-607 See chunnemes nu fona huueliihhemu ædhile christ chiboran uuerdhan scoldi, (Ecce ex qua tribu nasciturus esset christus docemur.)
 612-613 ni liugu ih dauid, (si dauid mentiar:)
 653 Endi ist siin namo, so sie inan nemnant: (et hoc est nomen, quod uocabunt eum:)

定動詞第一位についてはこれまでもドイツ語オリジナルのものとされてきているが、こうした例はそれを実証するものと言えるであろう。だがオリジナルであり非ドイツ語的なものではないとは言えるものの、ラテン語と語順が一致していたりあるいは非常に近い例が非常に多いことから、Isidor中の定動詞第一位については、ラテン語の影響、すなわちこの場合は量的な借用統語というものを考えざるを得ないであろう¹⁷⁾。

その量的借用について、ラテン語の語順に倣ってドイツ語でも定動詞第一位を

とっている割合はどの程度か調べてみると、平叙文中ラテン語原文が定動詞第一位をとっている例は全部で58例であり、その内ドイツ語でも定動詞第一位をとっている例が18例であるから、3分の1程度である。残りの例においてはほとんどが定動詞第二位になっている。特にラテン語原文で用いられていない主格の人称代名詞を補う場合や、ラテン語の総合的動詞形態を訳すのに迂言的形態を用いている場合には、それぞれ人称代名詞や分詞が文頭に置かれているのがほとんどで（17例中16例）、定動詞第一位になっているのは17中のほんの1例のみである。このことから定動詞第二位をとろうとする強い傾向性が更に確認できるであろうし、また定動詞第一位がオリジナルのものであれ、好んで用いられる語順ではなく、もしラテン語の影響が無かったら、ただでさえ少ない用例が更に少なくなっていたであろうと想像することができる。

平叙文における定動詞第一位の例を、地の文の箇所と聖書からの引用箇所に分けてみると、すでに述べたように、地の文の箇所が8例なのに対し、引用部分は21例で、引用箇所の方がずっと多くなっているが、これによって定動詞第一位については地の文より引用部分においてラテン語の影響が強く見られるといった結論を導き出すのは誤りであろう。というのは、ラテン語原文で平叙文中定動詞第一位がどれだけの数を占めているか見てみると、地の文の場合が124例中11例、引用箇所の場合が146例中43例となっており、非常に大きな差が見られるのである。古高ドイツ語のテキストにおける定動詞第一位の用例が地の文の箇所よりも引用箇所ですっと多く見られるのは、こうした原文の状態を反映したものにすぎないと考えらるべきであろう。したがって定動詞第一位に関しては、地の文の箇所と引用文の箇所との間でラテン語原文から受けている影響に特に有意の差は認められないということになる。

定動詞後置については、従来二つのグループに分けて扱われている。その一つは、文頭の文成分と定動詞の間にアクセントの無い代名詞や副詞が前接的(enklitisch)に挿入され、そのため定動詞が第三位になっているもの（以下定動詞後置Iとする）、いわば定動詞第二位の異形とも言うべきものであり、もう一つはそれ以外のもので、本来の定動詞後置とも言うべきものである（以下定動詞後置IIとする）。古高ドイツ語の定動詞後置は前者のタイプが多く、またドイツ語本来の語順であるとされているのに対し、後者はかなりまれであり、中にはこれはゲルマン語において存在していた定動詞後置につながるものではなく、専らラテン語の影響によるものであると考えている者もいる¹⁸⁾。そこで本稿でも定動詞後置についてはこの二つのタイプに分けて考察を行うことにする。

まず文頭の文成分と定動詞の間にアクセントの無い代名詞や副詞が前接的に挿入されたもの、定動詞後置 I から見てゆくが、Isidorにおいてそうした前接語として認めることができるのは、人称代名詞、再帰代名詞及び副詞の *dhar, nu, so* である。Reisはこのほかに指示代名詞や *dhar auh after* のような複数の副詞から成る副詞句が文頭の文成分と定動詞の間に置かれている文も、このタイプの文として見なしているが¹⁹⁾、文頭の文成分と定動詞の間に挿入される語は前接的なものであり、このタイプの定動詞第三位が定動詞第二位の異形的なものであると見る観点からすると、指示代名詞や副詞句を第二位に置いた文をこのタイプの文に含めて考えることはできない。またReisもLippertも、文頭の文成分と定動詞の間に人称代名詞が2つ挿入されている文もこのグループに入れているが²⁰⁾、それが妥当かどうかは、用例が1例のみであることもあり、判断するのが困難である²¹⁾。よって本稿ではそうした文をこのグループから外して考えることにする。

さて、Isidorにおいて文頭の文成分と定動詞の間に人称代名詞、再帰代名詞、*dhar, nu, so* が入っており、定動詞が第三位になっている例は全部で11例である²²⁾。いくつか例をあげてみると、

- 105 Isaias so festinoda, ((*dum sacrę natiuitatis eius archana nec apostolus dicit nec propheta conperit nec angelus sciuit nec creatura cognouit*) esaia testante,)
157 Erino portun ih firchnussu, (*Portas aereas conteram*)
158-159 endi dhiu chiborganun hort dhir ghibu, (*et dabo tibi thesauros absconditos*)

その内ラテン語と語順の点で一致が見られるのはわずか1例にすぎない。

- 688-689 Oxssso auh endi leo dhar ezssant samant spriu, (*Bos autem et leo ibi comedent paleas*,)

残りの10例においては、ドイツ語において定動詞の直前に置かれている語に相当する語がラテン語の側では無かったり、あるいは他の位置に置かれているなど、両者の間に共通性は見出せない。このことから、この語順がドイツ語本来のものであることは明らかであろう。また同じドイツ語オリジナルの語順であっても定動詞第一位の場合は、本来あまり好んで用いられない語順であるものがラテン語の影響によりその用例数を増すという現象が観察されたが、それとは非常に大きな違いがあると言える。

Behaghelによれば、この語順は大抵定動詞が文末にきている場合、すなわち3文成分からなる文で用いられ、文成分が4つ以上の文で用いられることは極まれだという²³⁾。そこで実際Isidorでどのようにになっているか調べてみたところ、まず文成分3つからなる文では、定動詞が文末にきておりその前に前接語が置かれている例が5例であるのに対し、定動詞が第二位に置かれており、前接語として用いられることのある語が文末に置かれている例は8例であった。この内後者においてはラテン語との一致を示す例が多く、7例を数えている。しかしこれは、ラテン語の影響というよりもむしろ定動詞を第二位へ置こうとする強い傾向の現れと見るべきであろう。もう一方の文成分4つ以上から成る文の方は、定動詞第三位でその前に前接語が置かれている例が6例で、定動詞が第二位に置かれていてその直後に前接語として用いられることのある語がきている例が27例となっている。後者の内ラテン語との共通性が見られるのはほんの5例に過ぎない。こうして見てみると、Behaghelの言うほどではないにせよ、Isidorでも前接語第二位、定動詞第三位という語順をとっている比率は、文成分3つから成る文の方が4つ以上の文成分から成る文よりもずっと高くなっているのが分かる。これは恐らく、BehaghelやLippertが述べているように²⁴⁾、文成分3つから成る文で定動詞を第二位にもってくると、文がアクセントが無く情報量の少ない非常に短い語で終わることになり、それを避けたいが為に、定動詞を文末にもってくることが多くなっているのであろう。

定動詞後置IIはかなりまれな語順と言われているものの、Isidorでは38例見られ、上で見た定動詞後置Iよりもこちらのタイプの方がむしろ数が多くなっている。BehaghelはIsidorにおける定動詞後置のこのタイプのもを、ドイツ語本来のものではなくラテン語の影響によるものと考えているが²⁵⁾、しかしそうすると、確かに定動詞後置IIの用例はラテン語原文との類似性を示すものが増えてはいるものの、そうした類似性の認められない例も存在しており、それらの例をどう説明するのが問題となってくる。こうしたことも含め、ラテン語の影響の問題を詳細に扱ったものには、すでに述べたように、Lippertの研究がある。彼は、定動詞後置IIはドイツ語本来の語順ではなく借用統語であるが、Isidorにおいては異質的借用統語は見られず、すべて同質的あるいは量的借用統語であり、そこに翻訳者の技術を見ることができるとしている²⁶⁾。論述の際彼は定動詞後置IIをいくつかのタイプに分類しているが、本稿でもそれに沿って、彼の述べていることを批判しつつ考察を進めてゆくことにする。

Lippertがまず最初にあげているタイプは、第一位に名詞的文成分、第二位(あ

るいは第二位と第三位)に前置詞に導かれた文成分が置かれており、その後定動詞という語順になっている文である。Lippertはこうした語順を、前置詞に導かれた文成分を付加語的にとり、先行する文成分と結び付けて考えたためと説明しており、また1例を除いてラテン語原文との間に語順の類似性が見られることから、量的借用統語が行われているものとしている²⁷⁾。しかしながらIsidorにおいて副詞的に用いられている前置詞句を付加語としても解釈できる例は、せいぜい次の1例ぐらいのものである。

457-458 Dhea uuehhun auur in heilegim quhidim arfullant sibun iaar.
(Ebdomada namque in sacris eloquiis septem annis terminatur.)

その他の例では、そのような解釈は不可能である。

348-349 Dher selbo forasago auh in andreru stedi chundida, dhazs ir dhera
dhrinissa chiruni bichnadi, dhuo ir sus quhad: (Cuius trinitatis mysterium
alias se cognouisse testatur idem propheta dicendo:)

570-571 Endi umbi dhen samun dhurah dhen selbun esaian quhad druhtines
stimna: (De hoc semine et per eundem esaian uox domini loquitur:)

589-591 Dhea iudea auur dhurah iro grimmin mit dhemu unscama habendin
andine quhedhant leogando dhazs noh ni sii dhazs ziidh arfullit,
(Iudei autem peruicacia inpudice frontis dicunt nondum esse hoc tempus expletum mentientes)

よってこれらの定動詞後置を、定動詞以前の部分を一文成分と見なしたことによるものと説明するのは不可能と言える。しかしこれらの例は異質的借用統語とも言うことはできない。というのは、確かに457-458, 570-571, 589-591の3例では、多少の違いはあるにせよ、原文との類似性が認められるが、348-349については、原文を非常に自由な形で訳しており、ラテン語の影響ということは考えることができないからである。しかしいずれにせよ、4例中3例において原文との間に類似性が認められることから²⁸⁾、ラテン語の影響が強いことは確かであろう。

Lippertが2つ目のタイプとしてあげているのはsoで始まる文であるが²⁹⁾、彼が問題としている文は、すでに述べたように、本稿では主文か副文か文脈から判断できない文として章を改めて考察を行うので、ここでは触れないことにする。ちなみに、このタイプの文は、定動詞後置IIの用例数の中にも入れていない。

次にLippertが挙げているのが、3文成分から成り、2番目がアクセントを担っ

ている文成分になっている文である³⁰⁾。このグループには次の3つの文が属している。

269-270 Endi saar dhar after offono araughida, huuer dher gheist sii, (Quis autem esset, adiecit:)

406 Oh ir sih selbun aridalida, (Sed semetipsum exinaniuit)

577 Iacob dher hoho fater bauhnendo quhad: (Iacob patriarcha significat dicens:)

Lippertはこれらの文の語順を質的借用統語(同質的借用統語)と考えている。こうした語順になったドイツ語内部の要因として彼は二つのことをあげている。一つは、第二位に置かれた副詞と第三位に置かれた定動詞が内容的に密接に結び付いており、あたかも一つの複合語のようになっているためというものである。もっともこれは269-270と577の2例についてのみのことで、406については当然当てはまらない。彼があげている二つ目の要因は、3文成分から成る文においてアクセントのある文成分を2番目に持ってくることによって得られるとするリズム上の効果である。しかしそもそもリズムというものは文成分単位ではなく、音節単位で考えるべきものであろう。彼の言うリズムの段階付けというものを文メロディーのようなものとして考えたとしても、それが果して同質的借用統語を受け入れる側の言語で支える要因となり得るものかどうか疑問が生じてくる。また同じような形の文が4文成分から成る文の中にも存在していることから、リズム上の理由でこれらの文がこうした語順になっているものとは考えにくいと言える³¹⁾。

431-432 Oh sie dhanne zellando quhedant dhazs noh christ ni quhami
(argumentantur dicentes necdum uenisse christum)

さて、これらの例をラテン語原文と比較してみると、406と577については語順の類似性が認められるが、それに対し269-270ではそのようなものは見られず、ラテン語の影響ということは考えられない。Lippertもこのことは認めており、彼は269-270における語順を類推によるものと説明している。しかし3文成分から成っているかどうかということに意味が認められない以上、それは考えられない。したがって少なくとも269-270に関しては、借用統語ということは一切考えられない。

Lippertが4番目にあげているのは、彼が先行する文と関係文的な結び付きを示しているとする文の内、文頭に置かれているのが名詞的文成分となっているものであるが、彼はこうした文を質的借用統語(同質的借用統語)によるものと考え

ている³²⁾。彼はこれを原文がどのようになっているかということからさらにいくつかに分類しているが、まず彼があげているのが、ラテン語の原文が、関係形容詞に導かれた関係文となっている次の2箇所である。

202-204 Mit dheseru urchundin dhiu eina gotnissa endi undarscheit dhero zuueiio heido fater endi sunes hluttror leohte ist araugit. (Quo testimonio et deitas et distinctio personarum patris filiique luce clarius demonstratur.)

309-310 Dhera selbun dhrinissa heilac chiruni aggeus dher forasago sus araughida in druhtines nemin quhedhendi: (Cuius trinitatis sacramentum et aggeus propheta ita aperuit ex persona domini dicens:)

ドイツ語ではどちらの文も独立した文の形になっているが、それは古高ドイツ語には関係形容詞というものが存在していないためにそれを指示代名詞で訳したことによるもので、この場合、前文と関係文的に結び付いているという解釈は当然可能と言えよう。またラテン語と語順を比較してみると、ドイツ語訳との間に明らかな共通性がみられる。次にLippertがあげているのはラテン語原文で関係詞ではなく、指示代名詞が用いられているケース2例である。

337-338 Endi auh ir selbo isaias in andreru stedi alle dhea dhrinissa in fingro zalu bifenc, dhuo ir sus prædicando quhad: (Alio quoque in loco idem isaias totam trinitatem in digitorum numero comprehendens sic predicat dicens:)

413-414 Dhesa infleiscnissa auh dhes gotes sunes heilac gheist in psalmon sus chundida, (Hanc incorporationem filii dei et spiritus sanctus in psalmis ita prænuntiauit dicens:)

この内、413-414の方では指示代名詞を用いて訳しており、関係文的接続ということもまだ考えられるが、337-338では人称代名詞が用いられており、そうした解釈が可能かどうか疑問である。またLippertは、337-338との類似性から、次の文もこのグループに入れて考えようとしている。

58-60 Isaias auh offonor den selbun sunu fona fater gaboranan gafestinata, duo er quad: (Esaias autem apertius filium a deo genitum confirmans ita adnuntiat:)

しかしこの文になると人称代名詞すら存在しておらず、関係文的接続という解釈は困難であろう。これら3つの文の語順を原文と比較してみると、58-60と413-414では明らかな一致が見られる。337-338でも近い語順にはなっており、定動詞(ラテン語では*participium coniunctum*)の位置も一致しているが、最初の2つの文成分の位置が逆になっており、相違点も見られる。Lippertが3番目にあげているケースは、ラテン語原文では代名詞が用いられておらず、ドイツ語の側でのみ文頭の文成分の中で指示代名詞が使われており、原文における定動詞の位置と、文頭の文成分が持つ前文との意味的なつながりが、関係文的な接続を生み出しているというものであり、次の2例がこのケースにあたる。

361-362 See hear nu dhea dhrifaldun heilacnissa undar eineru biihti dhazs himilisca folc so mendit. (Ecce trinam sanctificationem sub una confessione celestis persultat exercitus.)

362-364 Endi dhoh eina guotliihhin dhera dhrinissa syrafin mit dhemu dhrifaldin quhide meinidon. (unam gloriam trinitatis Seraphin trina repetitione proclamant.)

これもまた、関係文的に解釈が可能かどうか甚だ疑問である。またこの2つの文を原文と比較してみると、この場合もはっきりとした共通性が認められる。

Lippertは最後に特殊なケースとして、もはや形式的には関係文的接続を示唆するものは何もなく、ただ単に文頭の文成分が前文と内容的つながりを持っているに過ぎない例を2例あげている。

341-344 In dhrim fingrum chiuuissu dher heilego forasago dhea dhrifaldun ebanchiliihnissa dhera almahtigun gotliihhin mit sumes chirunes uuagu uuac. (In tribus quippe digitis propheta trinam diuine omnipotentie equalitatem sub quadam mysterii lance librauit)

344-347 Endi auh mit dhes meghines chilihnissu chraft dhes ebanuuerches endi einnissa dhera almahtigun spuodi, dhiu ein ioh samalih in dheru dhrinissu ist, in dhrim fingrum dhurahchundida. (et parilitate uirtutis cooperationem potentie et unitatem substantie, que una eademque in trinitate est, in tribus digitis declarauit.)

この例に至っては、関係文的解釈は不可能と言ってよいであろう。ラテン語原文

と比較してみると、この場合も明確な共通性を見ることができる。

Lippertのあげている定動詞後置IIのこの4番目のタイプを総合的に見てみると、確かに関係文的接続といったことで説明できる文もあるが、そのような説明が困難あるいは不可能な文の方が多くなっている。言い替えると、同質的借用統語と見なせない文の方が多いということである。ラテン語原文との関係を見てみると、ほとんどの文が語順の類似性を示しているのが注目に値する。同質的借用統語というものの考えられない文についても、ラテン語原文が語順に強い影響を及ぼしているのは確かであろう。

Lippertがあげている定動詞後置IIの5番目のタイプは、前文に関係文的接続をしているが、文頭の文成分が名詞的文成分ではなく、独立的に用いられたdherが接続要素となっている文である³³⁾。たとえば次のようなものである。

334-335 Umbi dhen druhtin nerrendo christ sineru selbes stimnu urchundida, dhuo ir quhad: (De quo dominus iesus christus propria uoce testatur:)

本稿ではこれらの文を、ラテン語原文で関係代名詞が用いられており、ドイツ語が定動詞後置となっている場合にはそれを副文として見なし、その他の文については、so-文の場合と同様に、主文か副文か判別困難な文として章を改めて述べ、ここでは扱わないことにする。

聖書からの引用の導入部分では、しばしば後続の引用部分を指すsusが用いられるが、その際susが第二位、定動詞が第三位に置かれることがある。Lippertはこれを定動詞後置IIの第6のタイプとしてあげている³⁴⁾。

263-264 In dhemu eristin deile chuningo boohho sus ist chiuuisso chiscriban: (In libro quippe primo regum ita scribturn est:)

313-314 Umbi dhen dhrittun heit, dher fona suni ist, sus quhad dher selbo forasago: (post hec de tertia persona, id est de filio, ita subiecit:)

Lippertは、この語順はラテン語に倣ったものであり、この第6のタイプは質的借用統語(同質的借用統語)であると考えている。このような語順をとるに至ったドイツ語内の要因については、これまで見てきたタイプのようにはっきりしたことは述べることができずにおり、ただリズム上に理由の可能性が示唆されているにすぎない。が、そのリズム上の理由というのが如何なるものなのか、susが入る

ことで文のリズムがどのように変わり、どのような効果が生み出されているのかといったことについては、一切触れられていない。ラテン語原文と比較してみると、どちらの文も多少原文との間に差異は見られるものの、語順の類似性は明らかであり、その影響を認めることができる。またLippertは次の文もひょっとしたらこのグループに入るかもしれないとしている。

126-129 Christus aaur sus quham fona fater ziuuaare so selp so dhiu
berahnissi fona sunnun, so uuort fona munde, so uuiisduom fona
herzin. (Christus enim ex patre ita emicuit ut splendor e lumine,
ut uerbum ab ore, ut sapientia ex corde.)

もしこの文も同種のものとするべきであるなら、聖書からの引用の導入部分であるかどうかといったことも、問題ではなくなってくると言える。

これら3例においては、第二位を標準的位置としている定動詞が第三位になっており、その直前、すなわち第二位にsusが置かれているわけだが、susを前接語と見なすことはできないであろう。というのは、susはsoに比べ指示性が強いいため、全くアクセントを持たず、あたかもその前の文成分と一体であるかのように捉えられることがあったとは考えられないからである。よってやはりこれらの文は、定動詞後置Iではなく、定動詞後置IIとするべきであろう。

以上、Lippertの記述に沿って定動詞後置IIについて見てきたが、彼の述べている理由では、上でみた4つのタイプのどれをも十分に説明することができないのは明白であろう。また、定動詞後置IIの用例の中には、彼があげているタイプのどれにも分類することができないものがあり、これらをどのように説明するのかも問題となってくる。たとえば、

367-369 Endi dhoh dhiu huuedheru in dhemu bauhnunge dhero dhrio
heido goates ni sindun zi chilaubanne dhazs sii dhrii goda siin, so
sama so dhea dhrii heida sindun; (In deitate trium personarum
significatio, non autem sicut tres persone ita et tres dii credendi
sunt,)

461-464 Fona daniheles ziide aaur dhes forasagin untazs dhiu selbun
christes chumfti ziidh mera sindun dhanne zehanzo endi feorzuc
uuehhono chizelido, (A tempre itaque danihelis prophete usque ad
presens tempus plus quam CXL ebdomade adnumerantur.)

701-702 Hear auh noh frammert saghet dher selbo forasago esaias
fona christe, (Adhuc idem esaias de christo)

しかしそうかといって、ラテン語の模倣といったことでIsidorの定動詞後置IIすべてを説明できるものでもない。確かに定動詞後置IIについてはラテン語原文の影響を大なり小なり受けていると考えられる例が多くなってはいるが³⁵⁾、すでに見たようにラテン語の影響の全く認められない例が存在しているからである。上にあげたLippertの6つのタイプのどれにも分類できない例をとってみても、367-369の場合、少なくともはっきりとした影響は認められず、461-464と701-702については、定動詞の位置について原文の影響ということは全く考えられない。こうしたことから、Isidorにおける定動詞後置IIは、ドイツ語本来の語順と考えざるを得ないであろう。もっとも定動詞後置IIがドイツ語本来の語順といっても、もともと用例数が少なく、その上ラテン語の影響でそうした語順になっていると考えられる例が多いことから³⁶⁾、定動詞後置IIもやはり定動詞第一位と同様、当時すでにあまり好まれる語順ではなくなっていたと考えることができる。

定動詞後置の例を地の文の箇所と聖書からの引用の箇所に分けてみると、地の文の箇所が36例なのに対し、引用箇所はわずか2例となっている。これについては、地の文の箇所に比べ聖書の引用箇所では、原文で定動詞一位と二位の用例数がかなり多くなっており、全体の7割以上を占めていることが一つの原因になっているものと思われる(地の文 第一位11:第二位30:後置83/引用文 第一位49:第二位55:後置42)。しかしながらそうした原文の状態を考慮に入れても、36例に対し2例というのはあまりに差が開いており、定動詞後置IIについては、地の文の方にラテン語の影響がより強く現れているのは確かであろう。

(続く)

註

- 1) Sonderegger (1974) S.243.
- 2) 古高ドイツ語の定動詞の位置を扱ったものには、ここであげている論文のほか、J. Fourquetの *L'Ordre des éléments de la phrase germanique ancien. Études de syntaxe de position*. Paris 1938 (=Publications de la Faculté des Lettres de l'Université de Strasbourg. Fasc. 86)があるが、残念ながら入手できなかった。
- 3) Reis (1901) S.213f.
- 4) *ibid.* S.214.

- 5) *ibid.* S.214.
- 6) Diels (1906(1967)) S.8.
- 7) *ibid.* S.3ff.
- 8) Plant (1969) S.14: „Wir müssen nämlich eines erkennen: soll überhaupt je eine möglichst befriedigende Darstellung der althochdeutschen Syntax geschehen, so muß der Darstellungsgegenstand eben die Syntax derjenigen althochdeutschen Sprache sein, die sich uns in den Denkmälern darbietet, ohne Werturteile über Vermeidung „undeutscher Partizipialkonstruktionen“, ohne Hineinlesen lateinischen Einflusses in diese oder jene Verbstellung. All das kann durchaus der Wahrheit entsprechen, aber wir wissen éines auf jeden Fall nicht: inwiefern—falls überhaupt—das Sprachgefühl dieses oder jenes Mönches diese oder jene Konstruktion als „undeutsch“ empfunden hat oder nicht.“
- 9) Lippert (1974) S.29ff.
- 10) *ibid.* S.52-97.
- 11) 本稿で定動詞後置といった場合、これはSpäterstellung、すなわち定動詞を第三位以降に置く語順のことを指す。SchlußstellungあるいはEndstellung、すなわち定動詞を文末に置く語順のことではない。
- 12) R. SchützeichelのAlthochdeutsches Wörterbuchでは、*aur*は*Adv.*、*Konj.*、*aber*、*(je) doch*、*abermals*、*wieder*、*wiederum*；*nämlich*となっており、*chiuuisso*も*Adv.*、*Konj.*、*gewiß*、*sicher*、*unzweifelhaft*、*bestimmt*、*mit Sicherheit*、*Bestimmtheit*、*Gewißheit*、*wahrlich*；*fürwahr*、*ja*；*zwar*；*nun*、*also*、*aber*、*auch*；*nämlich*、*daher*；*denn*、*da ja*となっている。
- 13) 接続詞としても副詞としても用いられる語には、*aur*、*chiuuisso*のほか*ioh*があげられる。しかしIsidor中では*ioh*はすべて接続詞として用いられており、問題となるケースは一つも無い。またEggersはVollständiges lateinisch-althochdeutsches Wörterbuch zur althochdeutschen Isidor-Übersetzungにおいて、*oh*は*autem*及び*sed*（共に接続詞）の訳語として用いられている時は接続詞、*tamen*（副詞）の訳語として用いられている時は副詞としているが、ラテン語の単語が副詞だからといってドイツ語の訳語も副詞ということには必ずしもならないであろう。SchützeichelのAlthochdeutsches Wörterbuchでは、*oh*は*Konj.*としてしかのっておらず、本稿でもそれに従った。
- 14) Isidorでは1箇所だけ*ni*が定動詞の直前に来ていない例がある。
 197-199 In dhesemu quhide ni bluchisoe eoman, ni dhiz sii chiuuisso dher anderheit godes, selbo druhtin christ. (In qua sententia nemo dubitet secundam esse personam.)
 本稿ではこの文（2番目の文）を全文否定ではなく、部分否定ととった。
- 15) 4つのケースの用例数は次の通り。1-10例、2-8例、3-6例、4-11例。また本稿では定動

詞後置として扱ったが、次の文もひょっとしたらこの内の4番目のケースと見なすべきかもしれない。

302-304 Endi dhoh dhiu huuedheru nu, dhazs ir dhea einnissa gotes araughida, hear saar after quhad: (Ubi tamen ut unitatem deitatis ostenderet, confestim admonet dicens:)

- 16) この内7例はendiの次に定動詞がくるいわゆる“*Inversion nach und*”になっている。
17) LippertはM. SchelerのAltenglische Lehnsyntax. Die syntaktischen Latinismen im Altenglischen. Diss. Berlin 1961. に従い、借用統語を大きく3つに分類している(Lippert (1974) S.31. なお引用符で囲んだ部分は、Schelerの論文からの引用)。

Nützlich wurde uns eine ‚Theorie der Lehnsyntax‘ für das Altenglische bei M. Scheler, aus der die folgenden Punkte übernommen werden können.

Der Verf. unterscheidet:

Erstens, ‚heterogene‘ Entlehnungen (‚fremdartige syntaktische Gebilde werden übernommen‘).

Zweitens, ‚homogene‘ Entlehnungen (‚durch fremden Einfluß werden neue Varianten einer der heimischen Sprache zumindest ansatzweise und in verwandter Form bekannten Konstruktion geschaffen‘).

Neben diesen ‚qualitativen‘ Veränderungen gibt es ‚quantitative‘ oder ‚sekundäre‘ (‚der Gebrauch heimischer Konstruktionen wird durch fremden Einfluß vermehrt‘).

- 18) こうした考え方の者としては、たとえばBehaghelをあげることができる。

Deutsche Syntax. Bd. IV. S.15を参照のこと。

- 19) Reis (1901) S.219ff.
20) Reis (1090) S.219f., Lippert (1974) S.54.
21) これは次の箇所である。

409 Fona hreue aer lucifere ih dhih chibar. (Ex utero ante luciferum genui te,)

- 22) 本稿では定動詞後置IIに分類してあるが、ひょっとしたら次の文も定動詞後置Iと見なすべきかもしれない。

296-298 In dhiu auh dhanne, dhazs ir oba dhem uuazsserum suueiboda, dhen heilegun gheist dhar bauhnida. (In eo vero, qui superferebatur aquis, spiritus sanctus significatur.)

- 23) Behaghel (1932) S.14.
24) Behaghel (1932) S.14, Lippert (1974) S.55.
25) 註15を参照のこと。
26) Lippert (1974) S.85.

27) *ibid.* S.69f.

28) Lippertはもう1例、次の文をこのグループに加えている。

689-690 *huuanda dhea herostun mit dheru smelerun dheodu eigun dhar chimeine lerunga. (quia principes cum subiectis plebibus communem habent doctrinam.)*

本稿ではこの文を主文か副文か判別困難な文とし、ここでは扱わないことにした。

29) Lippert (1974) S.71ff.

30) *ibid.* S.73ff.

31) Lippertはこの文を主文ではなく、先行する *dhazs*-文の続きと考えており、このグループの中には入れていない。Lippert (1974) S.74. Anm.80を参照のこと。またLippertも Monseer Matthäusについては、4文成分から成る文が存在していることを認めている。

Matthäus. 12, 37 *enti fona diin selbes uuortum suntigan dih gasihhis (et ex verbis tuis condemnaberis)*

しかし彼はこの文中の *dhih* を、 „ein enklitisches, kaum eigenen Gliedwert beanspruchendes Pronomen“ (Lippert (1974) S.75)としており、この文を自分の述べていることに対する反証例とは考えていない。

32) Lippert (1974) S.76ff.

33) *ibid.* S.80f.

34) *ibid.* S.81.

35) 定動詞後置IIの場合、定動詞第一位の場合とは異なり、ラテン語と語順の類似性が見られると言っても、文の構造及び文成分の数とその配置に至るまで原文と一致している例は少なくとも38例中6例、多くは何らかの相違を示している。原文との類似性を考える際には、こうした相違をどの程度までだったら許容し、原文とドイツ語訳の語順が類似していると思なすか、すなわちラテン語の影響が現れていると思なすかが問題になってくるが、はっきりと線を引くのは困難である。しかしIsidorの定動詞後置IIについては、少なくともその3分の2においてラテン語原文の影響が認められると言って差し支え無かろう。

36) 定動詞後置IIがドイツ語本来の語順だとすると、これは量的借用統語ということになる。

参 考 文 献

Behaghel, Otto: Deutsche Syntax. Bd. IV. Heidelberg 1932.

Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax. 5., verbesserte Auflage. Tübingen 1966.

Diels, Paul: Die Stellung des Verbuns in der älteren althochdeutschen Prosa (= PALAESTRA LIX). Berlin 1906 (Nachdruck: New York 1967).

Eggers, Hans (Hrg.): Der althochdeutsche Isidor (=Altdeutsche Textbibliothek. Nr.

63). Tübingen 1964.

- Eggers, Hans: Vollständiges lateinisch-althochdeutsches Wörterbuch zur althochdeutschen Isidor-Übersetzung. Berlin 1960.
- Erdmann, Odkar: Grundzüge der deutschen Syntax. 2 Bände in einem Band. Stuttgart 1886 und 1898 (Nachdruck: Hildesheim/Zürich/New York 1985).
- Köbler, Gerhard: Verzeichnis der Übersetzungsgleichungen der althochdeutschen Isidorgruppe. Göttingen 1970.
- Lippert, Jörg: Beiträge zu Technik und Syntax althochdeutscher Übersetzungen (= MEDIUM AEVUM. Bd. 25). München 1974.
- Paul, Hermann: Deutsche Grammatik. Bd. III. Tübingen 1919 (Nachdruck: 1968).
- Plant, Helmut R.: Syntaktische Studien zu den Monseer Fragmenten (= JANUA LINGUARUM. SERIES PRACTICA 75). The Hague/Paris 1969.
- Reis, Hans: Über althochdeutsche Wortfolge. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 33. 1901.
- Schützeichel, Rudolf: Althochdeutsches Wörterbuch. 4., überarbeitete und ergänzte Auflage. Tübingen 1989.
- Sonderegger, Stefan: Althochdeutsche Sprache und Literatur. Berlin/New York 1974.